

# 魚が帰って来た

「水底に棲むカマツカという魚がここ二、三年ふえてきているんです。水質が良くなってきた証拠でしょうね。ホタルが飛び交っていた昔とは比較になりませんが、嬉しいことです。」と山鹿市三岳地区・岩野川を守る会（会員数七〇二名）の会長、一森さんは浄化運動の成果を話してくれました。

岩野川は福岡県の男岳を源とし、鹿北町、山鹿市を流下して菊池川へ注ぐ延長二、四・五キロメートルの河川です。県下でも、もともと水質が良いといわれていた川で、多くの魚が生息し、県内外からの釣客が絶

えなかつたといえます。

ところが、昭和四十年代になって、上流の砕石や工場排水、生活排水のため少しずつ汚濁が進み、魚の数が減ってきたそうです。これを見かねた住民が立ち上がり、昭和四十七年、「岩野川を守る会」を結成し、地域ぐるみの浄化運動が始まりました。主な活動内容は、①残留性の少ない農薬の使用、②婦人会を通じた無リン性洗剤や石けんの使用普及、③毎月一回の川岸の投棄物（空カンなど）の回収、④砕石場や工場への美化協力要請、などでした。この十年間の活動を振り返って、一



アユ



ヤリタナゴ



ヤマメ



ヨシノボリ



タカハヤ



アブラボテ



オイカワ



カワムツ



ウグイ



コイ

## のどまれる生活排水対策

また、この程行ったアンケート調査でも、回答者の八〇%以上が川や海が汚れていると感じており、その原因として第一に毎日の家庭生活から発生する生活排水、第二にゴミの投棄をあげています。このように川や海の水質汚染の大きな要因となりつつある生活排水について私達はどうか対処したらよいのでしょうか。

生活排水には台所、洗濯、入浴などの家庭雑排水と、尿とがあり、これらを処理する施設としては、①公共下水道、②家庭雑排水と尿を併せて処理する「合併し尿浄化槽」、③地域ごとに家庭雑排水を共同で処理する「共同処理施設」などがあります。この中で最も望ましいのが公共下水道で「生活排水対策の決め手」と言われています。このため県・市町村では公共下水道整備に積極的に取り組んでいます。これには多くの費用と長い年月を要するため、昭和五十七年度末現在、県の人口に対する普及率は一六%余りとなっています。

## 助けを求める川や海

森会長は「一度汚濁した川を元の状態に戻すことの難しさを痛感しました。今後は、一つの水系全体の水質を保つために、各地域の浄化運動が互いに協力し、連携を強めていくことが必要でしょう」と指摘しています。現在、県下各地で川や海を自らの手で守ろうとする組織や団体が次々と誕生し、水質浄化についての勉強会や地域ぐるみの清掃活動が展開されています。

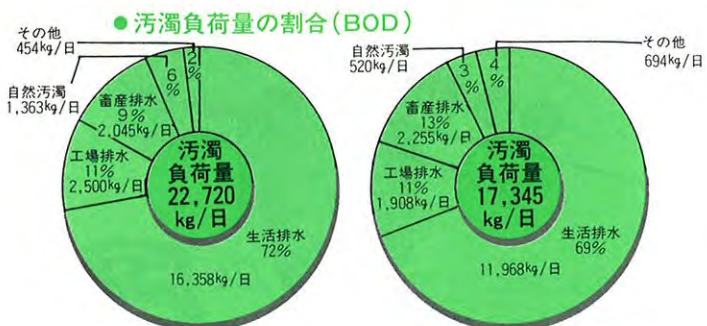
県下では河川一五地点、海域三七地点において毎年、水質を調査しています。

この結果、特に都市排水の影響を受ける中小河川の水質汚濁が著しいことが分かってきました。またきれいであると言われていた河川の上流部でも水質の悪化は見逃せないものになってきています。昔から

## 「三尺下れば水清し」

という諺がありますが、これは川に汚物を捨ててもやがてきれいになる現象を表現したもので、専門的には川の自浄作用と呼んでいます。しかし、自浄作用の能力以上に汚物が流入すると、水中に溶け込んだ酸素がなくなり、河川は悪臭を発生するドブ川になって、魚も棲めなくな

# 生活排水が水を汚す



緑川水系 (昭和54～55年度)

白川・坪井川水系 (昭和52～53年度)

川や海を汚すものは、これまで工場などの産業系排水が主な原因でしたが、法律による規制が強化された結果、これら産業系排水による汚濁は随分改善されてきました。これに代わって、生活様式の変化や人口の集中化により、近年生活排水による汚濁の割合が著しく大きくなってきています。県では汚濁原因をつかむため、昭和五十二年度から五十五年度にかけて、白川・坪井川水系緑川水系で調査を行いました。その結果、河川に流入する汚濁物質の割合は生活排水が六九・七二%、工場排水が一・一%、畜産排水が九・一三%、自然汚濁が三・六%と、生活排水が大半を占めていることが分りました。

※ BOD (生物化学的酸素要求量)  
水中の汚濁物質が微生物によって分解される時に消費される酸素の量で、水の汚れを示す指標の一つ。この数値が大きいほど汚れていることを示す。(主として川の汚濁指標に使用)